

巻 頭 言

北海道支部副支部長 千葉 隆弘 (北海道科学大学)

北海道支部理事・副支部長を拝命してから1年が経過しました。これまでは一つの役割に集中することが多かったのですが、支部を俯瞰して見る役割へと変化して、改めて支部の活動が会員の皆様に対してはもちろんのこと、社会に対して重要な役割を果たしていることに気付かされました。今後も北海道支部が研究活動並びに社会貢献活動を通じて発展できるように微力ながら精一杯お手伝いさせて頂きたいと思っております。

札幌では、2026年1月24～25日に、大雪に見舞われました。24時間降雪量は54cmに達し、鉄道および道路の交通障害が際立ちました。札幌での大雪は2021年12月と2022年2月に発生しており、鉄道の交通障害は記憶に新しいです。しかし、道路の交通障害については、当時、大きく取り沙汰されていない記憶があります。建設業では2024年4月から働き方改革が動き出しましたが、道路除雪では人手不足が深刻化しているものと推察されます。少子高齢化に伴う労働人口の急速な減少が主な要因であると考えられますが、一方で、安易にサービスの低下だと位置付ける風潮の存在は否定できません。少子高齢化に伴い社会は雪に対して脆弱になり、これまで通りの対応が通用しなくなるのは当然であります。今後どのように大雪に対応していくのかについての議論の積み重ねが必要ではないかと感じています。

さて、この度「北海道の雪氷」第45号を刊行する運びとなりました。本誌には6月5～6日に開催の研究発表会で発表された内容を元にした論文36編を収録いたしました。北海道支部総会と同日に開かれる研究発表会は、支部にとって年に一度、会員が一堂に会して行われる研究発表の場であり、会員交流の場でもあります。支部の基幹行事であるのはもちろんですが、若手の研究者にとっては全国大会を前に発表の機会を提供する場になっております。発表は雪氷物理、結晶のようなミクロな研究から、氷河・氷床や海水などメソスケールの研究、そして社会基盤に関わる研究と多岐に渡り、北海道支部らしい発表会となりました。発表およびご参加いただいた皆様、研究発表会の運営にご活躍いただいた担当理事、支部会誌の発行にご尽力いただいた担当理事の皆様に感謝申し上げます。

本誌収録の2026年度事業計画にありますように、北海道支部は今年度後半には雪崩の講演会、地域講演会の開催や、札幌開催のサイエンスパークへの参加など雪氷に関する多彩な行事を予定しております。今後とも北海道支部の取り組みへの皆様のご支援をよろしくお願い申し上げます。